



手
抄
本

雑
之
始
書
物
字

四
卷
長
崎
地
方

津田文庫
文庫 1
1763



早稲田大学
図書館蔵書

強竹者

能齋齋

出



つた文庫

一強并能始の書身

一強竹の書身

一紀河原斎書身

一同能組

先此片は強竹の書身
書身は強竹の書身

010190605278

書部はけの書部にあはれ
名目なく一は是の類も中後
お知し中後部は紀行系
節を能く二部を言書也
書部下は是を二條に分
1763.
此の部法を又二部に分
遠中亦の部を又二部の遠に
此の部法を又二部に分

書部の中は又二部に分
此の部法を又二部に分
名目なく

書部はけの書部

一書部の中は又二部に分
此の部法を又二部に分
名目なく
一書部の中は又二部に分
此の部法を又二部に分

神宗御書 善書ありて

しるすに神宗御書あり

一 九の御書ありて

神宗御書ありて

御書ありて

一 神宗御書ありて

御書ありて

御書ありて

神宗御書ありて

一 神宗御書ありて

御書ありて

御書ありて

御書ありて

御書ありて

一 神宗御書ありて

御書ありて

吾世何所智之哉
能世何所
能世何所
能世何所

一 禮作の古氣ゆゑに神書を

其の下のその年一書を批

りて其の古氣ゆゑに神書を

上り下り

一 實の古氣ゆゑに神書を

其の下のその年一書を批

辨曰作あるは神書ゆゑに神書

を批りて其の古氣ゆゑに神書

の書を批りて其の古氣ゆゑに神書

後持道公の記述の由り二条

康道公の記述の由り二条

古の記述の由り二条

古の記述の由り二条

古の記述の由り二条

法高を 市之儀の中を

普達 亦不親識のまじり

動中の

一 高巻法式 古来大橋二方

比知中橋二方中の世山橋二方

比知但し橋脚の二高巻の堅

底の二高巻の橋脚の少く相

又くや

一 紅河原段を能く高巻二方

比知馬場のうしろに

を高巻お仕するに橋脚

たれをよめる不橋の二方

れたれを飛ぶ方に也二方

部と地盤を難くするに

一 能く方法中二方

筆の也 二方

乃其家亦依之也如安撫要
包起之卷之四破之程書
官未可物仕小之居与古代集
お遠之身おる之平り

一古事世之物与格人の破の時代
書を世の破れたるものなり
三乃の二つは他千作と云なり
一乃其家の破れたるものなり

一付能はしむと因ひてお物
く其古物とお物と云の破れたる
早事と程能越るなりなり
夫こふ又云お應仕と因ひ
其小可物と云古物と云中
お事と云お破れたるなりなり
破りとお用ひなり
一言何れに記し置る所申集

此の品 義徳杯とて名

仕立 西果

厨傍 百餘年あり

隈 一あり

只今も不持仕立

権杖杯 小鼓 一様

厨傍 古新居

厨傍 新田 皮子 徳心 有

日花

厨傍 木製 徳心 有

深 沢 与 巾 紋

之 祖 運 意 ね 歌 仕 立 有 宗

物 仕 立

権杖杯 海地 澤 与 巾 紋 有

厨 書 局 同 白 皮 入 徳 心 有

手 巾 有 宗 仕 立 有 巾 紋 有

市書簿に及下りお書きか

只今お物作

指足梅の園に深き所の将表

思はぬお物はあつた

台座の作はあつた

お物の作はあつた

深き一物

先之程お物作はあつた

台座の作はあつた

深き一物

先之程お物作はあつた

台座の作はあつた

深き一物

先之程お物作はあつた

あつた

先之程お物作はあつた

何れ何れと云々
精進の道
情而筆の道
子細は

市井の道
市能の道
くわ書

常道

世の道
市井の道
市能の道
くわ書
常道

十月 歳世

隱作心書

觀何係作分

白髮自如居士冠形之靈

學亦何州在物也

觀何世何係與作分

依之布面以平作分

也物也 九月後 物凡

ノクヲウチ 陸學 陸

世何係作分

放也川 三何 北學 橋地

橋也 物也 橋也 百方

寫也 物也 色也 物也 物也

寫也 物也 物也 物也

姨也 老也 物也 物也

素也 物也 物也 物也

隱

世何原同博十の美由作分

弱法師 土部山 一哥石

十の美由作分

松平 國之 瑞田川 石橋

玉照之 倉生作

了信心 空到作

松浦物紀 福生作

丹古物紀 井何作

道登 田作

龜河原作分

物田 境波 竹石 ヤブ口コウカ

妙石毛

淳丹 ヨゴウ元久作 世何原之介 直書分

裕銅 正十三在之介 直書分 世何原之介 直書分

柏崎 甲

永橋 根之田物末の介 世何原之介 直書分 永橋之介 直書分

静

鏡河原 舟

車下

玉柳原

新下

南河原

鏡河原

淡路 舟

久六カマ

世河原

子

清旭 舟

梅川 舟

高士心

初代

三河原

花柳

玉井

安宅

三井寺淨師 盛長 惟覺

城寺より 二龍 居士 朝心

急井 貴法 天 二人の子

美布 終

正月 之 能

志美 作

方集 公 執事 二 志美 子 志美

又 志美 子 志美 子 志美 子

志美 子 志美 子 志美 子

志美 子 志美 子 志美 子

志美 子 志美 子 志美 子

志美 子 志美 子 志美 子

志美 子 志美 子 志美 子

志美 子 志美 子 志美 子

志美 子 志美 子 志美 子

志美 子 志美 子 志美 子

志美 子 志美 子 志美 子

丁酉

觀世音

念事公案

一 隨之作者の事家高法

破し白

加藤 芭蕉 江口 西行 松

明石 基上 源吉 三白

子 芳山 曉 竹生 隆 思 福

荻 新 熊 直 楊 吉 肥 小 替

阿 目 少 塔 源 中 傳 氣 放 市 僧

大 寺 谷 竹 清 通 源 中 僧

右 方 十 中 師 秀 市 師 三 寺 下

素 山 倍 禪 竹 作 中 師 兼 能 堂

解 禪 竹 仁 源 中 下

東 方 師 氣 山 一 角 仙 人

右 上 禪 竹 源 素 山 師 禪 風

作 中 師 禪 竹 仁 源 中 下

古の書物に於ては

只の仕不能たゆる仕担男

と書く事あり

新書に於ては

能くしる事あり

中ゆれ除く事

一書書く事あり

此の事あり

九龍世言の事あり

此の事あり

此の事あり

此の事あり

此の事あり

此の事あり

此の事あり

此の事あり

時代證とあるは予は

其能古作の由を述べ

羨らるる

一古作の由を證し其能古作

何るを予も急後仕由能證し

而能知親書之能也其能

ト中作をも亦之書之能也其能

能也中作をも亦之書之能也其能

書之能也其能也其能也其能

と羨らるる

一古作の由を證し其能古作

何るを予も急後仕由能證し

而能知親書之能也其能

ト中作をも亦之書之能也其能

能也中作をも亦之書之能也其能

羨らるる

一 古代を言はぬはるるを中ちるもの
ありのお節は時、物よこらぬ
昔の事をいふ、知未の時、あま
近き事、大い事、時、事、神、種
ふ、お節、中、は、あ、り、の、こ、は、遠、く、あ
一 古代、い、ち、ま、御、杯、に、御、見、お、ち、り、あ
ち、ま、に、御、見、に、御、あ、お、ち、り、あ
中、代、の、あ、り、の、こ、は、遠、く、あ

一 古代、い、ち、ま、御、杯、に、御、見、お、ち、り、あ
ち、ま、に、御、見、に、御、あ、お、ち、り、あ
中、代、の、あ、り、の、こ、は、遠、く、あ
一 古代、い、ち、ま、御、杯、に、御、見、お、ち、り、あ
ち、ま、に、御、見、に、御、あ、お、ち、り、あ
中、代、の、あ、り、の、こ、は、遠、く、あ

多し即ち其の如く仕立たる所

一太閤秀吉公の御代に於て

其の御代に於て其の御代に於て

仕立たる所仕立たる所仕立たる所

其の御代に於て其の御代に於て

其の御代に於て其の御代に於て

七月

八月

九月

一 徳川家との御代に於て

其の御代に於て其の御代に於て

世に因りて其の御代に於て

其の御代に於て其の御代に於て

其の御代に於て其の御代に於て

其の御代に於て其の御代に於て

其の御代に於て其の御代に於て

其の御代に於て其の御代に於て

先程の如く作中作中
あれ程に乱れ即ち即ち切
小甲作

一山曉之得、一休之作、中観、
又、山曉、空、解、の、即、の、作、
の、柳、并、の、花、の、即、の、
作、の、即、の、休、の、即、の、
作、の、即、の、中、の、即、の、

一書、由、十、の、能、を、新、仕、
の、即、の、即、の、
の、能、の、作、の、即、の、
の、即、の、即、の、

一、年、の、能、を、
の、即、の、
の、即、の、
の、即、の、

かしこは好しと申すは
三浦のむらぬし
三浦のむらぬし
三浦のむらぬし
三浦のむらぬし

候と申すは
三浦のむらぬし

三浦のむらぬし

三浦のむらぬし

三浦のむらぬし

三浦のむらぬし

三浦のむらぬし

三浦のむらぬし

三浦のむらぬし

三浦のむらぬし

三浦のむらぬし

三浦のむらぬし

三浦のむらぬし

今月氷小半之有母宜

在俗中謂法法之有母宜

計也之有母宜之先其小半之有

而勿得之有母宜之有母宜

而之月氷作之有母宜

別素之文數比年比月古則氷

之有母宜之有母宜之有母宜

之有母宜之有母宜之有母宜

時休之有母宜之有母宜

之有母宜之有母宜

一有母宜之有母宜

之有母宜之有母宜

之有母宜之有母宜

之有母宜之有母宜

之有母宜之有母宜

之有母宜之有母宜

在野中... 初...
... 七日...
... 初...
... 河...
... 初...
... 川...
... 河...
... 初...
... 初...
... 川...
... 河...
... 初...
... 川...
... 河...
... 初...

西... 初...
... 初...
... 初...

一... 初...
... 初...
... 初...
... 初...
... 初...
... 初...
... 初...

古宮寺にありて水乃難言の
楫にこれ出するを楫に中め
海にこれ入るを系し物に舟
舟大ゆに改更何れも舟
まこと水神とてとるに難言
とてあるありて楫に中めを
舟一楫ありてこれ舟に
の留をこれ舟に水神とて

舟の中とてし毎の望み舟大宮
舟を舟とて舟に舟と舟
舟に舟とて舟に舟に舟
舟に舟とて舟に舟に舟
舟に舟とて舟に舟に舟
舟に舟とて舟に舟に舟
舟に舟とて舟に舟に舟
舟に舟とて舟に舟に舟

り神として當めらるるは別神
と云ふは、ちかぬもの異なり
一神といふは、けりて神の體に
神靈ありて、けりて神の體
と神神と宗とをいふは、
ちかぬ別神の體の體
大なるを、神の體の體
神の體の體、神の體の體

日月の體、神の體、神の體
と云ふは、神の體の體
と云ふは、神の體の體
と云ふは、神の體の體
と云ふは、神の體の體

神の體の體、神の體の體
と云ふは、神の體の體
と云ふは、神の體の體
と云ふは、神の體の體
と云ふは、神の體の體

謂地之有南瞻波那之令旨
南亦分てるるるとして有る事也
北亦西之極也其人多之也
南西之極也其人多之也
ハ陽の所也其人多之也
北西之極也其人多之也
中一之仕ふる事也其人多之也
南西之極也其人多之也

七月

高千穂

高千穂

一 藤原の末裔也其人多之也
高千穂の地也其人多之也
一 藤原の末裔也其人多之也
高千穂の地也其人多之也
高千穂の地也其人多之也
高千穂の地也其人多之也
高千穂の地也其人多之也

つらひなる飛也非おまのすん

一西十作之新種おまの時代おまの

あや

一靴之包

古書路伝

右靴の包おまの家と古書路伝

口まゝおまの代と能くおま

おまの代と能くおまの代

おまの代と能くおまの代

おまの代と能くおまの代

おまの代と能くおまの代

おまの代と能くおまの代

おまの代と能くおまの代

一物衣 古書路伝

一法被 古書路伝

一袖包 古書路伝

一帯圍子 古書路伝

右の土器が倉到孫古片取
は4口ありあき世々

一 洞 杉ふた取 七三

一 洞 扇ふりく 七三

右の杉皮箱が倉到三爾

お取仕のくふあき世々

一 仕舞子 倉到七三

右の 台座現物倉到右京

馬舟馬仕舞子 倉到七三

お取仕のくふあき世々

七月 倉到七三

在り十五

一 漆器 漆器

一 漆器 漆器

意の中の中 漆器 漆器

坊

一 新子方居ぬかはしら板と

ぬ久知しら板不板書り

一 檜柳幅七尺或九尺心仕り

一 檜をうしね長檜をうしね

みい三つし板り

一 色紙只みとる毎不三布巻

法衣衣色紙紙

一 古作の書をお籠りしり

一 形作の古作の御信成後

あふれ

七月

おるす

隠作

一 百部

檜柳

右等書二両本取寺蓮如

上人と作しり

市橋の作しり

一喜田千和能存新法也
作の酒造り也

一藤巻三郎重三郎也
酒造り也

一西千作一藤巻酒造り也

一辻能おのり中極不時代也

ふきり也

一市南家馬也の酒造り也

一石井千和の酒造り也
おのりも酒造り也

七月 美多十也

十作と時代

・徳若

一藤巻安野太字人五八
おのり酒造り也

と若子承元三年分寛子文

十三年と承元三年

寛文十三年分
承元三年と
百三年と

・石川新左衛門重政

人王の年代海軍百院私安

年中と若子承元三年分寛子

十三年と承元三年

寛文十三年分寛子承元三年

・赤松清成

新大無田時代

増河保久法

人王百代海軍融後承和

十三年と承元三年

寛文十三年分寛子承元三年

・米良宗忠

増河保久時代承元三年

法元増子

福平石三郎
治左

人王可尔汝书在虎卷永

三年一尔尔尔尔尔尔尔

官之文士年尔二万七千七百
尔文士年尔尔尔尔尔尔尔

春卷名

增何尔汝也尔同尔尔尔

卜毛云尔尔尔尔尔尔尔

尔尔尔尔尔尔尔

小半清光

春卷同尔尔

尔智尔尔

尔尔尔尔尔尔尔尔尔

尔尔尔尔尔尔尔尔尔

尔尔尔尔尔尔尔尔尔
尔尔尔尔尔尔尔尔尔

尔尔尔

尔尔尔尔尔尔尔尔尔

尔尔尔尔尔尔尔尔尔

中何れか書又竹以玉色紙
中何れか書又竹以玉色紙
中何れか書又竹以玉色紙
中何れか書又竹以玉色紙
中何れか書又竹以玉色紙
中何れか書又竹以玉色紙
中何れか書又竹以玉色紙
中何れか書又竹以玉色紙
中何れか書又竹以玉色紙
中何れか書又竹以玉色紙

七月 未雨書

